

# Effects of Acotiamide on the Esophageal Motility Function in Patients with Esophageal Motility Disorders: A Pilot Study

牟田, 和正

<https://doi.org/10.15017/1806874>

---

出版情報：九州大学, 2016, 博士（医学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

(別紙様式2)

氏名	牟田 和正			
論文名	Effects of Acotiamide on the Esophageal Motility Function in Patients with Esophageal Motility Disorders: A Pilot Study			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	田口 智章
	副査	九州大学	教授	北園 孝成
	副査	九州大学	教授	中村 雅史

## 論文審査の結果の要旨

高解像度食道内圧検査(High-resolution manometry; HRM)の登場と発展によって食道運動異常症(Esophageal motility disorders; EMDs)の診断は進歩したが、その病因は解明されておらずEMDsに対する根本的な治療法の開発は進歩していない。アカラシアを代表とする主要なEMDs患者は、嚥下困難や胸痛などのなんらかの治療が必要な重篤な症状を訴えているため、侵襲的な治療を受けざるを得ないのが現状である。アコチアミドは近年、機能性ディスペプシア(Functional dyspepsia; FD)の治療薬として認可された消化管運動改善薬で、FD患者において障害されている胃適応性弛緩反応を改善するだけでなく、その他の消化管運動機能に影響を与えることが予想される。

本研究では、FD及びEMDsを疑う症状を有する29人を対象とし、FDの治療としてアコチアミド(100mg)を1日3回2週間投与し、その治療前後でHRMを施行して食道運動機能を評価した。

その結果、HRMにて29人は、アカラシア(n=4)、食道胃接合部通過障害(Esophagogastric junction outflow obstruction; EGJ00)(n=6)、無蠕動(n=2)、遠位食道痙攣(n=4)、高頻度蠕動不全(n=7)、微弱蠕動(n=2)、正常蠕動(n=4)と診断された。29人全体の解析では、アコチアミドの投与前後において、積算遠位収縮(Distal contractile integral; DCI)、安静時の下部食道括約筋圧(Basal lower esophageal sphincter pressure; BLESP)及び積算弛緩圧(Integrated relaxation pressure; IRP)は有意な変化は認められなかった。しかし、各疾患で分類したサブ解析では、EGJ00(n=6)においてアコチアミドは、IRP[前 19.5(15.1-30.8)、後 12.1(5.6-16.4)mm Hg]とDCI[前 2517.9(1451.0-8385.0)、後 1872.5(812.3-5225.3)mm Hg・cm・s]は有意に低下させた。

以上の結果から、アコチアミドは、正常食道運動に対して何ら影響は与えないもののEGJ00患者において障害されている下部食道括約筋(Lower esophageal sphincter; LES)の弛緩不全を正常化する可能性があり、EGJ00の画期的な治療薬となり得ることが判明した。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず研究目的、方法、実験結果などについて説明を求め、各調査委員により専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項につき種々の質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。